PLES Report 6

グローバル時代の英語と my English

田中茂範

PEN言語教育サービス

はじめに

「外国語」は英語で“a foreign language”といいます。この形容詞“foreign”には「異質な」という意味があり、それに language を付けることで、親しみのない、異質の言語という意味合いになります。たしかに、英語で何かを話そうとすれば、自分をうまく表現できないだとか、どうもしっくりいかないということを経験する学習者は少なくないはずです。これはまさに英語が「異質な言語」だからです。だとすると、英語を学ぶということは、馴染みのない英語を自分のものとして、親しみのある言語に変えていく過程だといえるかもしれません。

「外国語としての英語（English as a foreign language）」という言い方には、実は、もう一つの見方が含意されています。つまり、英語は、外国で話される言葉であるということです。もっと正確にいえば、英語は、アメリカ（あるいはイギリス、カナダなど）という国で、その国民が話す言語である、という見方がそれです。そこで、英語を学ぶ際の目標は、「米国人が話すような英語を学ぶことである」という見方が生まれます。そして、そこからさらに「英語を学ぶことはその文化を学ぶことで

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

ある」という捉え方が自然なものとして了解され、「英語を学ぶということは、米国で通用する言語規範を学ぶことである」という通念が多くの人に受け入れられるようになります。言い換えれば、何を適切な英語とみなすかという問題は、文化規範（例. アメリカ文化の規範）によって決められるということです。そして、この考え方は、英語教師（筆者も含め）の間では、ごく自然なこととして受け入れられており、特に、検定教科書や辞典の編纂を行う際には、英語の文化規範が表現の正誤を決める際の拠り所になります。

しかし、英語は今や「グローバル言語（global language）」あるいは世界共通語（linga franca）としての地位を築いており、この地位は当分の間は揺らぐことはないでしょう。実際、中国、韓国、東南アジア諸国でも英語教育に重点が置かれています。独仏でも英語が話せる人口が増えています。正確な統計は存在しませんが、15 億人ぐらいの人が英語を第二言語として使用していると推定されています（Crystal, 2001, 2003）。そして、その内で英語を母語とする人の数は約 4 億人だといわれます。まさに、英語がグローバル言語として機能しているということを物語っています。

日本でも、英語教育への国民的関心の高さは、いわゆるグローバル社会における英語の役割を念頭においてのことだと思われます。しかし、英語が世界共通語であるならば、英語でやりとりを行う相手は、英語の母語話者とは限りません。そこで、英語

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

の規範をどう考えるかという問題が出てきます。この問題に関する見解を積極的に発信している言語学者 David Crystal(2001)は、急速な英語のグローバル化に伴い、グローバル・スタンダードなるものが英語の規範となり、アメリカ英語やイギリス英語はその亜種（「方言」）になるだろうという予測を立てています。筆者は、クリスタルの見解に賛成ですが、この問題は少し突っ込んだ議論が必要だろうと考えています。以下、その方向の議論をしていきます。

規範：適応モデルと調整モデル

まず、ここで問いたいのは、「外国語としての英語」と「世界共通語としての英語」の違いが英語の規範問題に関してどういう違いをもたらすかということです。上述したように、「外国語としての英語」では、母語と外国語の関係が生まれ、英語を母語として使う文化圏が英語の規範を決めるという見解が主流になります。規範は「何が適切であるか」の基準であり、「外国語としての英語」においては、「文化的規範」が前提となるということです。そこで、英語を学ぶ者も、その文化規範（典型的には「アメリカ英語」か「イギリ英語」）を求め、その規範に自分の英語を適応させようとします。これを規範の「適応モデル（adaptation model）」と呼ぶことができます。

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

この適応モデルは、英語教師であれば自然に受け入れる考え方で、筆者もどこかでこれを当然のこととして認めています。しかし、この適応モデルは、行き過ぎると、知らず知らずのうちに、負の心理的影響を学習者に与えることになります。一言でいえば、「足りない」という意識であり、「間違いや不自然な表現に対する過度に否定的反応」です。母語話者と比べると、学習者の英語はたしかに不十分です。学習者は母語話者のように英語を話すことができず、たくさんの間違いや不自然な表現をするようになるでしょう。そして、母語話者の英語に合わせようとする気持ちが強ければそれだけ、自分の英語の間違いや不自然な表現を気にしてしまい、恥ずかしいという気持ちまでが誘発されてしまうことがあります。「理想の自分（適応モデルに合致した自分の英語）」と「実際の自分（適応モデルに合わない英語を話す自分）」の「開き（gap）」が英語を使うことに対する積極性を削いでしまうのです。

しかし、先に述べたように、今や英語は「世界共通語」として機能しています。一人の日本人がバンコックでタイ人と英語でやりとりをする場面だとか、ムンバイでインド人と英語でやりとりをする場面を容易に想像することができるでしょう。もちろん、日本の其処かしこでいろいろな国の出身者と英語で話す場面もあるでしょう。そういう状況で大切なのは、相手とのやりとりにおいて英語が通じるかどうかであって、例えば米語の規範に合った英語を話しているかどうかは問題ではないということです。

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

もちろん、どんな言語的なやりとりにも「適切さ（appropriateness）」というものがあり――それがまさに規範ということですが――、世界共通語としての英語における規範は、文化が決める「文化規範（cultural norm）」ではなく、場面が決める「場面規範（situational norm）」だといえます。バンコックでタクシーの運転手とやりとりをする場面と国際学会で研究発表を行う場面では「適切な英語」は異なりうるということです。場面が求める期待値に関しての共有感覚（参加者が互いにこうであろうという思い）が場面規範の核心です。「国際学会ではこういう英語が求められる」ということに関する参加者の共有感覚です。

世界共通語として英語を使う場面では、当然、異なるものに対する「寛容（tolerance）」が求められます。自分の規範に合わないものを、一方的に排除するのではなく、自分の規範と異なるもの（ここでは、表現）をある程度許容するという寛容の精神を持つことが必要なのです。例えば日本人がアメリカ人と会話をしているとします。その中で、「変わった夢を見た」ということを伝えたい日本人が I saw a strange dream.といったとします。それに対して、英語の母語話者は、We don't say "see a dream." We say "have a dream."（われわれは see a dream とは言わず、have a dream と言う）と応じたとします。ここでの we は「排他的な we」で「われわれ（母語話者）は」という意味です。ここに、自分たちの規範に合わせることを求める姿勢を読み取ることができます。

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

しかし、多文化状況で英語を使う際には、適応モデルは機能しません。そこで求められるのは「双方向の調整」です。上の「夢をみた」のやりとりの場面で、相手の英語母語話者が次のように応答したとします。

“What do you mean by that? You mean, you had a strange dream. In my English, I say, “I have a dream,” but in your English, you say, “I see a dream.” That’s interesting.”

（それってどういうこと？「変な夢を have した」ということかな。それっておもしろいね。僕の英語では、I have a dream というけど、君の英語では I see a dream というんだね）

これは、双方向の意味調整を前提にした対応の仕方です。“I saw a dream”という言い方に注目し、それを間違いとせず、文化論の観点から表現の仕方に注目することで、会話をさらに豊かな内容にしていくことができるという可能性をここに読み取ることができます。実際、“I saw a strange dream” に対して相手からこういった反応をされれば、日本人の側も会話を展開したい気持ちになるでしょう。

このように、英語が世界共通語として使われる状況で機能するのは、「適応モデル」ではなく、「調整モデル（accommodation model）」です。ちょうど方言を異に

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

する人同士が日本語で会話をしていて意味の調整をするように、英語で会話をしている場合も、「相互調整」が求められるのです。

適応モデルに従えば、「母語としての英語（English as a native language）」が規範として最上位にあり、その下に「第二言語としての英語」や「外国語としての英語」が位置づけられるという序列が生まれます。そして、see a dream のような表現は「間違い」として斥けられてしまいます。しかし、世界共通語としての英語を使ったやりとりにおいて、母語話者（ネイティブ・スピーカー）が優位に立つわけではありません。こうした状況を踏まえて、“world Englishes”（世界英語）という用語が使われることがあります。English という名詞は、通常、固有名として扱われ、複数化されることはありません。しかし、Larry Smith や Braj Kachru らはあえて world Englishes と呼ぶことで、英語の種類が多様化しているだけでなく、規範そのものの多様化の必要性があることを複数語尾に託しています（Smith, 1981; Kachru & Smith, 1986）。つまり、Japanese English や Chinese English は American English や British English 同様に world Englishes の対等な成員であり、それぞれに優劣の違いはないという考え方です。

筆者は、world Englishes の思想は、英語の現在状況を反映したものであり、賛同する立場にあります。しかし、一方で、これまでの world Englishes の議論は、「言語文化の優位性」といった問題に焦点が当てられすぎており、そこには「個の視点」が抜

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

けているような気がします（Tanaka, 2006）。American English と Japanese English を world Englishes という集合名の対等な成員とするという考え方の背後には、American English とか Japanese English というものが存在するということが想定されています。しかし、American English が個の言語活用を捨象した集合概念あるいは抽象概念であるように、Japanese English も実在しない観念です。

個の視点：my English

対話では「わたし」と「あなた」の関係が生まれます。だとすると、ここで注目しなければならないのは、American English とか Japanese English の多様性ではありません。Japanese English という言い方は個の視点が抜けているが故に、集合概念に留まっています。

複数のアメリカ人の言語活動を観察したとします。すると、一人ひとりが個性的な英語を話していることに気づくでしょう。3 歳児の英語と 30 歳の銀行員の英語は違います。性別、地域、職業などは、英語の変異の変数と呼ばれます。同じ一人の銀行員も仕事場で話す英語と恋人と話す英語は違うでしょう。すると「アメリカ英語」は、多様な英語表現あるいはその可能性を包括した言葉であり、それは集合名と見なすことができます。しかし、集合名としての「アメリカ英語」はそれが仮構であるが故

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

に、個人が所有することはできません。Japanese-English というものも同様に、誰しもそれを所有することはできません。

個々人に帰属する英語は必然的に“my English”（マイ・イングリッシュ）ということになります。それは集合概念としての言語でも使用としての言語でもなく、コンピテンス（能力）としての英語です。言語学では、「言語というもの」という仮構の言語を「ラング」と呼び、その使用（声の流れ、文字の流れ）を「パロール」と呼びます。パロールとしての言語が理論や小説や映画や歴史といった種々の物語を作るのです。パロールとしての言語を研究材料にすることでラングを構成する言語理論を構築しようというのが言語学の営みです。しかし、問題は、不断の声の流れ、文字の流れを紡ぎだすものが何かを考える必要があるのです。それは、コンピテンスとしての言語です。コンピテンスとしての言語は、個々人の中に育つ能力（言語を使い、理解する力）であり、英語の場合、これがまさしく my English ということです。

my English は、わたしたち一人一人の中に育つ英語であり、自分だけの英語ということです。米国大統領もハリウッドの俳優も等しく、それぞれの自分の英語（my English）を使って表現するしかありません。原理的にそうするしかないのです。個々人の my English はその人固有の言語能力であり、それを使って、英語を理解し、英語で表現するのです。そして、理解のしかたや表現そのものも my English の産物（product）なのです。だとすると、われわれが英語を学習する際にも、一人ひとりの

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

my English の構築を目指すべきということになります。つまり、個の視点で英語を捉えるということです。

　my English の構築を自覚する。これが筆者の論点です。「『英語』が使えるようになるために『英語』を学ぶ」という言い方をします。この表現には２つの「英語」が使われています。英語を学ぶという際の「英語」と、英語を使うという際の「英語」です。しかし、同じ「英語」というコトバが使われていても、それが指す対象は異なります。つまり、学ぶ「英語」は、母集団としての英語のサンプル（教科書や問題集やその他のの教材）以外ありえません。仮にアメリカ英語の規範に照らして適切なものを英語のサンプルとして学ぶとした場合、「学ぶ英語」は「アメリカ英語（のサンプル）」と呼ぶことができます。一方、「英語を使う」という際の英語は、my English 以外ありえません。それなのにもかかわらず、この２つの「英語」を同じとみなすことからいくつかの問題が出てきます。

　仮に学ぶ対象となる英語を「アメリカ英語」としましょう。個人が学ぶ英語は、そのサンプル（標本）です。例えば、映画 *Casa Blanca* を使って英語を勉強するとか Hemingway の小説 *The Sun Also Rises* を使って英語を勉強するという場合、映画も小説も使用された英語のサンプルです。教科書や参考書も同じです。

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

しかし、英語が使えるようになるために英語を学ぶという際には、my English の構築を自覚して学ぶ必要があります。my English は英語の使用を可能にする英語力だからです。単語を暗記し、文法問題を解く訓練をする、英文を和訳する、あるいは和文を英訳するといった活動は、英語の学習には違いありません。与えられたサンプルを知識として覚えても、それは「英語知識（英語について知っていること）」であって、「英語力」を保証するものではありません。my English を自分の中に構築するということは、単語知識ではなく語彙力を、文法知識でなく文法力を身に付けるということです。すると、自ずと学び方（そして教え方）も変わってくるはずです。

もうひとつ、英語を使う際の問題を指摘しておきます。英語力は英語を実際に使うことによってしか身につきません。しかし、「学ぶ英語」と「使う英語」を同一視することで、「学ぶ英語」の影が「使う英語」の向上を抑制してしまうという問題が起こりえます。その結果、「いくら英語を勉強しても英語が会話で使えるようにならない」ということが起こるのです。

簡単に説明します。会話は「わたし」と「あなた」の社会的相互作用として展開します。英語が会話のメディアだとすれば、それは my English と your English との相互作用が前提となります。そして、my English の善し悪しは、相手の your English とのやりとりにおいてそれが機能するかどうかで決まります。しかし、「間違いを恐れて会話ができない」ということをよく耳にします。ここでいう「間違い」は相手に指摘

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

されるか、自分で自己判断するかで「間違い」になります。そして、間違いかどうかの判断は、「学ぶ英語＝アメリカ英語」の規範に照らして行われる傾向があります。しかし、相手がタイ人で互いに英語で会話をしている状況だとどうでしょうか。この会話で肝心なことは、互いの英語がちゃんと機能しているかどうかであって、アメリカ英語に照らして正しいか間違っているかでは決してないはずです。また、タイ人の話す英語がアメリカ英語と違うから間違った英語を使っていると判断することも意味を成しません。

英語を学ぶ過程では絶えず「足りない」という気持ちを持ち続ける学習者が少なくありません。6 年間かけて学ぶ内容で 3 年しか経過していなければ、まだ「足りない、不完全である」という気持ちになるでしょう。しかし、母語としての日本語習得の途上にある 5 歳児の日本語が語彙力や表現力において、たとえ大人のそれと違っていても、「足りない」とか「不完全」であるとは、本人もそして相手も思わないでしょう。英語を使う場面では、自分が持っている英語力、すなわち my English で何とかするしかないのです。また、それが自然なことなのです。しかし、「学ぶ英語」を引きずる限り、「まだ足りないから使えない」という意識になってしまうのです。これも、「学ぶ英語」と「使う英語」を同一視することに由来する問題だといえます。

大学生に「英語を使うこと」についていろいろ質問してみると、「間違いに対する恐れ」そして「足りない」という気持ちが強く、英語を使うという一歩を踏み出せな

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

いでいる人が多くいます。では、「学ぶ英語」と「使う英語」の関係をどう捉えればよいのでしょうか。

学習者と表現者

英語を使えるようにするには、英語を使うしかありません。英語教育学者の Wilga Rivers(1983）は、外国語学習には「冒険的精神（adventurous spirit）」が不可欠であると繰り返し述べています。冒険的精神でその言語を使うということです。できれば外国語学習の初期段階から学んだら使うということが必要であるというのが Rivers の見解です。

ここでのポイントは、英語を使うことを通して英語を学ぶということです。「学んだら使う、使ったら学ぶ」を交互に行うこと、すなわち、「learn ⇔ use」の実践を行うということです。言い換えれば、私たち一人ひとりが、英語を学ぶ「学習者（language learner）」と、英語を使う「表現者（language user）」の２つの役割を演じる必要があるということです。「学習者」は「何時か、どこかで英語を使うようになるから英語を学ぶ」というでしょう。この言い分には匿名性があり、英語を使う切迫感は感じられません。しかし、表現者とは「今・ここで」英語を使う人のことです。表現者としてふるまうには、今ある英語（現段階での my English）をフルに活用して思いを表現する必要があります。表現者になりきらない限り、英語が使えるよう

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

にはなりません。しかし、同時に、my English の機能性や洗練さを高めるため、学習者として英語を学び続ける姿勢も併せ持つ必要があります。

カウンセリングの分野で著名な Carl Rogers は *On becoming a Person* というタイトルの本を書いています。直訳すれば「パーソンになっていく過程にある」ということですが、自己実現に向けて絶えず可能性を追求する人間像が“on becoming a Person”なのです。この書の中で、Rogers は鍵概念として“a fully functioning person”を繰り返し使っています。生きる過程のその都度その都度においては「十全に機能する人であれ」ということです。Rogers の考え方を本書の関心に引き寄せていうと、英語を使うその都度その都度においては、たとえどんなに小さな英語であっても、それを十全として受け止めて、その小さな英語を使い切る態度を持つことが表現者には求められるということです。足りないという不足感と決別し、持っている英語で何とかするという態度を実践する人が a fully functioning person（十全な表現者）だといえます。そして、十全な表現者であり続けることと、生涯学習し続ける学習者であることの両方を実践することの大切だということです。

英語の習得可能性

my English は獲得する能力です。音楽や絵画は才能が関係し、個人差が大きく関与し、だれでもできるという具合にはいかないかもしれません。しかし、言語について

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

いえば、だれでも自然に母語を身に付ける才能を持っています。第二言語の場合はどうでしょうか。my English はだれでも身につけることができるのでしょうか。年齢によってその習得に大きな違いが出てくるのでしょうか。

「外国語の学習は早く始めるほうがよい」という仮説があります。英語でいえば“The younger, the better.”ということです。“The younger, the better.” という仮説には、「年齢」という変数が第二言語学習に大きな影響を与えるという前提が含まれています。

第二言語学習に影響を与える変数には、認知的変数（知能、学習スタイルなど）、心理的変数（性格、動機づけなど）、言語的変数（言語差）、社会的変数（文化的関心、文化適応など）、等々、さまざまなものが含まれます(Brown, 2014)。年齢は、性別などと同様に生物学的な変数に含まれます。

年齢と言語習得との関係に関して「臨界期仮説（critical period hypothesis）」というものが引き合いに出されることがあります。これは、概略、言語習得の可能な（生物学的に決定された）時期というものがあり、それを過ぎると言語の習得が可能でなくなるというものです。言語の習得可能な時期を何時（いつ）とするかについては、明確な時期は示されていませんが、概して、生まれてから思春期までの期間が臨界期とみなされます。

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

この臨界期仮説は、大脳生理学者 Lenneberg(1967)が第一言語(母語)の習得において唱えられたものです。狼に育てられた少女などいくつかの特異な事例から、臨界期中に言語を身につける環境に置かれなければ、人はその言語を習得できない、ということが明らかにされています。しかし、第二言語習得についてはどうでしょうか。確かに、微妙な筋肉調整を必要とする発音能力においては、ある年齢を過ぎると第一言語の干渉を完全に克服することは困難です。しかし、思春期を過ぎて英語の学習を始めても、英語を何の苦なく使う力（場合によっては平均的な母語話者の英語力よりも高い力）を身に付けた人は少なくありません(Singleton & Lengel, 1995)。もちろん、「何の苦もなく英語を使う」というレベルまでになるには、日々英語を使う環境にあり、しかも相当の学習努力を払う必要があります。しかし、実際にそういう人がいるのは事実です。筆者の日本人の友人にも、そういう人が何人かいます。そうした事例は、臨界期仮説が第二言語習得には当てはまらないということを物語っています。

ほとんどの学習者が求めているのは、母語話者を凌ぐような英語力ではなく、いろいろな状況で十分に使える（機能する）英語力だろうと思います。そして、そのレベルの英語力であれば「だれでも身に付けることができる」というのが本書での前提です。その根拠となる事例を挙げておきます。筆者が長年関係している国際協力機構（JICA）では国際協力の一環としてボランティア業務を行っていますが、その中には青年海外協力隊によるボランティアといわゆる「シニアボランティア」が含まれま

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

す。シニアボランティアとして海外に赴任する前に、研修所でボランティアとして活動するのに必要な研修を受けることになります。その中に、語学研修が含まれています。必要に応じて約 25 言語が研修言語として提供されていますが、60 歳前後のシニアボランティア候補生も、スリランカであればシンハラ語、バングラディッシュであればベンガル語、ウズベキスタンであればウズベキスタン語を現地語として学ぶことになります。ハードな研修を通して、多くの候補生がそれらの言語の日常的運用力を身に付けていく姿を見てきました。しかし、年齢とともに外国語を学習する力が落ちてくる（Birdsong, 1999）という指摘は認める必要があります。しかし、総じていうなら、必要があれば、そして十分な形で指導が行われれば、年齢に関係なく第二言語を身につけることができるということを物語っています。シニアボランティア以外にも、そういう事例は多数存在します。海外出身の力士の中には日本語がとても上手な人が多くみられます。中国語を母語とする作家楊逸(ﾔﾝ・ｲｰ)は『時が滲む朝』(2008)で芥川賞を受賞しています。テレビに出演している海外出身の芸能人の場合もしかりです。おそらく、彼らに「特別の言語習得能力」が備わっていたからではなく、必要があったから日本語を習得することができたのだろうと思います。

結論としては、程度の差こそあれ、「誰でも、何時(いつ)でも第二言語を学ぶことができる」ということです。つまり、英語力は誰でもある程度身につけることができるのです。学習態度の問題として「英語はむずかしい（やっても無理）」ということから始

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

めるか、「英語はやればできる」から始めるかでは、結果に大きな違いがでてくると思います。

もちろん、いくらグローバル状況だからといっても、日本語が通じない人との関わりを持つか持たないかは、個人の選択です。しかし、そういう人と関わる機会が増えればそれだけ、英語によるコミュニケーションの必要性――my English を使う必要性――が高まります。

しかし、ここで強調しなければならないのは、my English は単なるコミュニケーションの「手段」や「道具」ではないということです。もし英語がたんなる手段であれば、「翻訳機」を開発し、それを持ち歩けばよいということになります。しかし、どんな状況であれ、自己と他者のやりとりにおいては、それぞれの個性が創発します。そして個性は使う英語の中に、使う英語を通して表現されるのです。個性のある英語は画一化した翻訳機の守備範囲を超えています。結局、個々人が自分の英語（すなわち、my English）を我が物にしていくことが求められるのです。自分が英語の所有者になるということです。そして、my English はその人だけの英語であり、そこに個性が生まれるのです。

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

参考文献

Birdsong, D. (1999). *Second language acquisition and the critical period hypothesis*. New Jersey: Lawrence Earlbaum Associates Publishers.

Brown, H.D. (2014). *Principles of language learning and teaching (6th edition)*. London: Pearson Educational ESL.

Crystal, D. (2001). *Language and the Internet.* Cambridge: Cambridge University Press.

Crystal, D. 2003. *English as a global language (2nd edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kachru, Y., & Smith, L. E. (2008). *Cultures, contexts, and world Englishes*. New York: Routledge.

Lenneberg, E. (1967). *Biological foundation of language*. New York: John Wiley & Sons.

Rivers, W. (1983). *Communicating naturally in a second language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Rogers, C. (1961). *On becoming a Person.* Boston: Houghton Mifflin Company.

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.

Singleton, D. & Lengyel, Z., eds. (1995). *The age factor in second language acquisition : A critical look at the critical period hypothesis*. Philadelphia: Clevedon.

Smith, L. E. (Ed.). (1981). *English for cross-cultural communication*. London: Macmillan.

Tanaka, S. (2006). English and multiculturalism—from the language user's perspective. *RELC*, 37, pp. 47-66.

註：本稿は、『英語を使いこなすための実践的学習法：my English のすすめ』（大修館書店、2016.8）の第 1 章分を抜粋したものです。筆者の英語教育観を示すものであり、ここに再掲します。

Copyright © 2019 PEN言語教育サービス. All Rights Reserved.